

## 晩堂大課

司祭 われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に。

誦経 「アミン」。

われら かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き  
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

てん おう なぐさ もの しんじつ しん あ ところ もの み ところ もの ばんぜん ほうぞう  
天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の寶藏なる

もの せいめい たま しゅ きた われら うち お われら もるもる けがれ いさぎよ しぜんしゃ  
者、生命を賜ふ主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢れより潔くせよ、至善者よ、

われら たましい すく たま  
我等の靈を救ひ給へ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる せい  
至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる

もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんじ な よ  
者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

しゅあわれ  
主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

てん いま われら ちち ねが なんじ な せい なんじ くに きた なんじ むね てん おこな  
天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はる

るが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免す

が如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 けだしくに けんとう こうえい なんじちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、

誦経 「アミン」。

しゅあわれ  
主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん。

きた われら おう かみ こうはい ふふく  
來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはい ふふく  
來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

第六十九聖詠 (第1週、月から木までのみ、金曜日以降は次の第4聖詠へ)

かみ すみやか われ すく しゅ すみやか われ たす たま わ たましい もと もの ねが はじ え はずかしめ  
 神よ、速に我を救へ、主よ、速に我を助け給へ。我が 靈を求むる者は、願はくは耻を得て 辱  
 う わざわい われ のぞ もの ねが しりぞ あざ われ むか よしよし い もの その  
 を受けん、禍を我に望む者は、願はくは退けられて嘲けられん。我に向ひて嘻嘻と云ふ者は、其  
 われ はずか よ ねが しりぞ およ なんじ もと もの ねが なんじ ため よろこ  
 我を辱しむるに因りて、願はくは退けられん。凡そ爾を求むる者は、願はくは爾の爲に喜び  
 たのし なんじ すくい あい もの ねが つね かみ おおい い われ まず とぼ かみ  
 樂まん、爾の救を愛する者は、願はくは常に神は大なりと云はん。我は貧しくして乏し、神よ、  
 すみやか われ いた たま なんじ われ たすけ われ すく もの しゅ おそな なか  
 速に我に格り給へ、爾は私の助なり、我を救ふ者なり、主よ、遅はる母れ。

→ 別冊 **大齋** アンドレイの大カノン

→戻る

第4聖詠

わ ぎ かみ わ よ とき われ き たま わ せまき あ とき なんじわれ ひろき あた われ あわれ  
 吾が義の神よ、我が籲ぶ時、我に聴き給へ。我が狭に在る時、爾我に廣を與へたり。我を憐み  
 わ いのり き たま ひと こ わ さかえ はずか いずれ とき いた なんじらむなしき この  
 て、我が祈を聴き給へ。人の子よ、我が榮の辱しめらるること何の時に至るか、爾等虚を好  
 いつわり もと いずれ とき いた なんじら しゅ そのせいしゃ わか おのれ ぞく し われよ  
 み詭を求むること何の時に至るか。爾等主が其聖者を析ちて己に屬せししめしを知れ、我籲  
 しゅ これ き いか つみ おか なか とこ あ なんじら ころろ はか おのれ しず ぎ  
 べば、主は之を聴く。怒りて罪を犯す母れ、榻に在るとき爾等の心に謀りて、己を鎮めよ。義の  
 まつり ささ しゅ たの おお もの い たれ われら ぜん しめ しゅ なんじ かんぼせ ひかり われら  
 祭を獻げて、主を待め。多くの者は言ふ、誰か我等に善を示さん。主よ、爾の顔の光を我等  
 あらわ たま なんじ わ ころろ たのしみ み かれら ばん さけ あぶら ゆたか とき まさ われ  
 に顯し給へ。爾の我が心に樂を満つるは、彼等が餅と酒と油とに豊なる時より勝れり。我  
 あんぜん ふ い けだししゅ ひとりなんじ われ ぶなん よ わた たま  
 安然として偃し寝ぬ、蓋主よ、獨爾は我に無難にして世を渡らしめ給ふ。

第6聖詠

しゅ なんじ いきどおり もつ われ せ なか なんじ いかり もつ われ ぼつ なか しゅ われ あわれ たま  
 主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。主よ、我を憐み給へ、  
 われよわ しゅ われ いや たま わ ほね おのの わ たましい はなはだおのの なんじしゅ  
 我弱ければなり、主よ、我を醫し給へ、我が骸は慄き、我が靈も甚慄けばなり、爾主よ、  
 いずれ とき いた しゅ おもて かえ わ たましい まぬが なんじ あわれみ よ われ すく たま けだし  
 何の時に至るか。主よ、面を轉し、我が靈を免れしめ、爾の憐に由りて我を救ひ給へ。蓋  
 し うち なんじ きおく はか うち たれ なんじ さんよう われなげき つか まいやわ とこ  
 死の中には爾を記憶するなし、墓の中には誰か爾を讃揚せん。我嘆にて憊れたり、毎夜我が榻を  
 あら わ なみだ われ しとね うるお わ め うれい より か わ もろもろ てき よ おとろ およ  
 滌ひ、我が涙にて我の褥を濡す。我が眼は憂に因て枯れ、我が諸の敵に因りて衰へたり。凡  
 ふほう おこな もの われ はな けだししゅ わ な こえ き しゅ わ ねがい き たま しゅ わ  
 そ不法を行ふ者は我を離れよ、蓋主は我が泣く聲を聞けり、主は我が願を聴き給へり、主は我が  
 いのり い ねが わ もろもろ てき はずか いた う ねが しりぞ にわか はじ  
 祈を納れんとす。願はくは我が諸の敵は辱しめられて痛く撃たれん、願はくは退きて俄に愧  
 え  
 を得ん。

第 12 聖詠

しゅ われ まった わす いずれ とき いた なんじ おもて われ かく いずれ とき いた わ おのれ  
主よ、我を全く忘ること何の時に至るか、爾の面を我に隠すこと何の時に至るか、我が己  
たましい うち はか ところ うち にちやうれい いた いずれ とき いた わ てき われ たか いずれ  
の靈の中に謀り、心の中に日夜憂を懐くこと何の時に至るか、我が敵の我に高ぶること何の  
とき いた しゅわ かみ かえり われ き たま わ め あきらか われ し ねむり い  
時に至るか。主我が神よ、顧みて我に聴き給へ、我が目を明にして、我を死の寐に寝ねざらし  
たま わ てき われ かれ か い はざらん ため われ せ もの われ うご とき よろこ ため  
め給へ、我が敵に我は彼に勝てりと曰はざらん爲、我を攻むる者が我の撼く時に喜ばざらん爲な  
われなんじ あわれみ たの わ ころなんじ すくい よろこ われおん ほどこ しゅ ほ うた しじょう しゅ  
り。我爾の憐を恃み、我が心爾の救を喜ばん、我恩を施すの主を讃め頌ひ、至上なる主の  
な あが うた  
名を崇め歌はん。

しゅわ かみ かえり われ き たま わ め あきらか われ し ねむり い たま わ  
主我が神よ、顧みて我に聴き給へ、我が目を明にして、我を死の寐に寝ねざらしめ給へ、我が  
てき われ かれ か い ため  
敵が我は彼に勝てりと曰はざらん爲なり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す。三次、 躬拜三次

しゅあわれ  
主 憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。 <大斎第1週奉事式では以下略>

第 24 聖詠

主よ、爾に我が靈を挙ぐ。吾が神や、爾を恃む。我に世々愧なからしめよ。我が敵を我に  
勝ちて喜ばしむる母れ。凡そ爾を恃む者にも愧なからしめ給へ。妄に法を犯す者は願は愧  
を得ん。主よ我に爾の道を示し我に爾の路を訓へよ。我を爾の真理に導きて我を訓へ給へ。  
蓋爾は我が救ひの神なり、我日々に爾を恃めり。主よ、爾の鴻恩と爾の慈憐を記憶せよ。  
蓋是れ永遠よりあるなり。我が少き時の罪と過とを記憶する母れ。主よ、爾の仁慈に依り  
爾の慈憐を以て我を記憶せよ。主は仁なり義なり。故に罪人に道を教示す。謙遜の者を義  
に導き謙遜の者に己の道を教ふ。凡そ主の道は其約と其啓示を守る者に在て慈憐なり、真  
実なり。主よ、爾の名に因て我が罪を赦し給へ、其大なるを以てなり。誰か主を畏るる人  
たる、主は之に選ぶべき道を示さん。彼の靈は福に居り、彼の裔は地を継がん。主の奥義  
は彼を畏るるものに属し、彼は其約を以て彼等に顕はす。我が目常に主を仰ぐ、其我が足  
を網より出すに因る。我を顧み、我を憐めよ。我独にして苦めらるるに因る。我が心の憂  
益多し、我が苦難より我を惹き出せ、我が困苦、我が勞瘁を顧み我が諸の罪を赦し給へ。  
我が敵を觀よ、何ぞ多きや。彼等が我を怨むの恨は何ぞ甚き。我が靈を護りて我を救ひ、  
我が爾に於る恃に愧なからしめ給へ。願はくは無てんと義とは我を護らん蓋我爾を恃めば

なり。神やイブライリを其<sup>もろもろ</sup>諸の憂より救ひ給へ。

第30 聖詠

主よ爾を恃む、我に世々に愧なからしめよ。爾の義を以て我を免れしめ給へ。爾の耳を我に傾けて、速に我を免れしめよ、我が為<sup>いわお</sup>に磐石となり<sup>かくれが</sup>隠蒙となりて我を救ひ給へ。蓋爾は我が石山、我が石垣なり、爾の名に依て我を導き、我を治め給へ。<sup>ひそか</sup>竊に我が為に設けたる網より我を引き出し給へ、蓋爾は我の<sup>かため</sup>固なり。我が神を爾の手に渡す。主真理の神や、爾曾て我を救へり。我虚しき偶像を尊ぶ者を疾み、唯主を恃む。我爾の憐を歡び樂まん。蓋爾は我が禍を顧み、我が靈の憂を知り、我を敵の手に付さず、我が足を広き處に立てしに由る。主よ、我を憐れみ給へ、我<sup>くろしな</sup>困狭に居ればなり。我が目は憂に縁りて枯れたり。我が靈と我が腹も亦然り。我が生命は悲の中に盡き、我が年は嘆の中に盡きたり、我が力は罪に依て弱り、我が骨は枯れたり。我は諸敵に因て、隣にも辱しめられ、知人には忌み憚られ、我を<sup>ちまた</sup>衢に見る者は我を避く。我は死者の如く人の心に忘れられたり。我は<sup>やぶ</sup>壊られたる器の如し。蓋我は多人の誹を聞く。彼等が相議して我を攻め我が靈を抜かんとを計るとき、四方に<sup>おそ</sup>惶れあり。主よ唯我爾を恃む、我謂ふ、爾は我の神なり。我が日は爾の手に在り、我を我が敵の手及び我を攻る者より免れしめ給へ。爾の光る<sup>かんばせ</sup>顔<sup>かんばせ</sup>を爾の僕に顕し、爾の憐を以て我を救ひ給へ。主よ、我爾に呼ぶに由りて、羞を得しむる母れ、願くは無道の者は羞を蒙りて、地獄に沈黙せん。<sup>ねがわ</sup>願<sup>おごり</sup>くは<sup>あなどり</sup>傲と侮を以て、義人に向ふて悪きを言ふいつわりの口は唾とならん。大なる哉、爾の恩、爾を畏るる者の為に畜へ、爾を恃む者の為に、人の子の前に備へたる者や。爾は彼等を人の乱より何時が面の<sup>かげ</sup>かげに庇ひ、彼等の舌の<sup>あらそい</sup>争より幕の中に隠す。主は崇め讃めらる。彼は己の妙なる憐を我に堅固なる<sup>まち</sup>城邑の中に顕したればなり。我が惑ひる時我爾の目より絶たれりと思へり。然れども、我爾に呼ぶ時、爾は我が祈の声を聴き給へり。主の<sup>ことごとく</sup>悉の義人は主を愛せよ。主は忠信の者を護り、傲慢の者には厳く報ゆ。凡そ主を頼む者は勇め。爾等の心は固くなるべし。

第90 聖詠

至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず。主に謂ふ、爾は我の<sup>かくれが</sup>避所、我の<sup>ふせぎ</sup>防禦、我が頼む所の我の神なりと。彼は爾を獵者の網より、滅亡の疫より脱れしめん、彼は其羽にて爾を覆はん、其翼の下にて爾危からざるを得ん。彼の真実は楯なり、鎧なり。爾は夜の<sup>おどし</sup>震驚と昼の流矢、闇冥に行く<sup>はかりやまい</sup>行疫と正午に暴す<sup>わるやまい</sup>瘴疫<sup>おそ</sup>を懼れざらん。千人爾の側に、萬人爾の右に<sup>たお</sup>仆るとも、爾に近づかざらん。爾只目を注ぎて不虔の者の報を見ん、蓋爾

謂へり、主は我の恃なりと、爾至上者を擇びて、爾の<sup>かくれが</sup>避所と為せり。悪は爾に臨まず、<sup>うつりやまい</sup>疫癘は爾の住所に近づかざらん、蓋爾の為に其天使に命じて、爾の凡の路に爾を護らしめん、彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に<sup>つまず</sup>躓かざらしめん。爾蝮と毒蛇とを<sup>ふみ</sup>踐み、獅と大蛇とを<sup>ふみ</sup>踏まん。彼我を愛するに因りて、我之を援けん、彼我の名を識るに因りて、我之を衛らん。我を呼ばば、我彼に聴かん、憂の時我彼と<sup>とも</sup>偕にし、彼を援け、彼を榮せん、<sup>いのちながき</sup>壽考を以て彼に飽かしめ、我の救を彼に<sup>あ</sup>顕さん。

誦經 光榮は父と子と聖神<sup>°</sup>に帰す、今も何時も<sup>いつ</sup>世世に、「アミン」。  
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に帰す。(三次、躬拝三次)  
 主憐めよ。(三次)  
 光榮は父と子と聖神<sup>°</sup>に帰す、今も何時も<sup>いつ</sup>世世に、「アミン」。

【神は我等とともにす】<sup>かみ</sup> 諧和の聲を以て<sup>ほがらか</sup> 朗に左の諸句を歌ふ、イサイヤ八章九節至九章七節、選句

(ソロ) <sup>かみ</sup> 神は我等と<sup>われら</sup> 偕にす、<sup>とも</sup> 異邦人よ、<sup>いほうじん</sup> 此を知りて<sup>これ</sup> 従へよ、<sup>したが</sup> 神我等と<sup>かみ</sup> 偕にすればなり。

(詠) <sup>かみ</sup> 神は我等と<sup>われら</sup> 偕にす、<sup>とも</sup> 異邦人よ、<sup>いほうじん</sup> 此を知りて<sup>これ</sup> 従へよ、<sup>したが</sup> 神我等と<sup>かみ</sup> 偕にすればなり。

神は我等と 偕 ともにす 異邦人よ これを一 知りて  
 したがえよ、 神はわれらと 偕 ともに すればな ーり

<sup>ち</sup> 地の極までも<sup>はて</sup> 之を<sup>これ</sup> 聴け、<sup>き</sup> 神我等と<sup>かみ</sup> 偕にすればなり。

神は我等と ともに すれば な ーり

<sup>けんりよく</sup> 権力ある者よ、<sup>もの</sup> 従へ、(詠) 神は我等と<sup>かみ</sup> 偕にすればなり。 <以下同様>

<sup>またいきおい</sup> 復勢を張らば、<sup>は</sup> 復敗られん、<sup>またやぶ</sup> 神我等と<sup>かみ</sup> 偕にすればなり。

<sup>はかりごと</sup> 謀を設けば、<sup>もう</sup> 主は之を<sup>しゅ</sup> 毀たん、<sup>これ</sup> 神我等と<sup>かみ</sup> 偕にすればなり。

<sup>ことば</sup> 言を出さば、<sup>いだ</sup> 必成らざらん、<sup>かならず</sup> 神我等と<sup>かみ</sup> 偕にすればなり。

なんじら おそ ところ われら おそ おどろ かみ われら とも  
爾等の畏るる所は我等畏れず、驚かず、神我等と偕にすればなり。

しゅ わ かみ もつ せい な かれ わ おそれ かみ われら とも  
主我が神を以て聖と爲す、彼は我が畏とならん、神我等と偕にすればなり。

われかれ たの かなら われ せい かみ われら とも  
我彼を頼まば必ず我を聖にせん、神我等と偕にすればなり。

われかれ のぞ かれ よ すくい え かみ われら とも  
我彼を望み、彼に因りて救を得ん、神我等と偕にすればなり。

み われおよ かみ われ あた しよし ここ あ かみ われら とも  
視よ、我及び神が我に與へたる諸子は此に在り、神我等と偕にすればなり。

くらやみ うち ゆ たみ おおい ひかり み かみ われら とも  
幽暗の中を行く民は大なる光を見たり、神我等と偕にすればなり。

し かげ ち お もの ひかり なんじら てら かみ われら とも  
死の蔭の地に居る者よ、光は爾等を照さん、神我等と偕にすればなり。

けだしおさなご われら ため うま こ われら たま かみ われら とも  
蓋 嬰は我等の爲に生れ、子は我等に賜はりたり、神我等と偕にすればなり。

けんべい そのかた あ かみ われら とも  
権柄は其肩に在り、神我等と偕にすればなり。

その わへい おわり かみ われら とも  
其和平は終なし、神我等と偕にすればなり。

その な おおい ぎじ ししゃ とな かみ われら とも  
其名は大なる議事の使者と稱へらる、神我等と偕にすればなり。

しんみょう ぎし とな かみ われら とも  
神妙なる議士と稱へらる、神我等と偕にすればなり。

だいのう かみ しゅさい わへい きみ とな かみ われら とも  
大能の神、主宰、和平の君と稱へらる、神我等と偕にすればなり。

らいせい ちち とな かみ われら とも  
來世の父と稱へらる、神我等と偕にすればなり。

かみ われら とも いほうじん これ し したが かみ われら とも  
神は我等と偕にす、異邦人よ、此を知りて従へよ、神我等と偕にすればなり。

こうえい ちち こ せいしん き かみ われら とも  
光榮は父と子と聖神に歸す、神我等と偕にすればなり。

いま いつ よよ かみ われら とも  
今も何時も世々に、「アミン」、神我等と偕にすればなり。

(詠) <もう一度> かみ われら とも いほうじん これ し したが かみ われら とも  
神は我等と偕にす、異邦人よ、此を知りて従へよ、神我等と偕にすればなり。

The image shows two staves of musical notation in G major (one sharp) and 4/4 time. The first staff begins with a first ending bracket. The lyrics are written below the notes, with '偕' (together) written under the first staff and '我等' (we) and '偕' (together) under the second staff.

神は我等と ともにす 異邦人よ これを一知りて  
したがえよ、 神はわれらと ともにすればなり

誦經

しゅ ひ おく なんじ かんしや きゆうせいしゅ もと われ つみ くれ よる わた われ すく  
主よ、日を送りて爾に感謝す、救世主よ、求む、我に罪なく暮と夜とを度らしめて、我を救ひ  
たま  
給へ。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す。

しゅざい ひ おく なんじ さんえい きゅうせいしゅ もと われ いざない くれ よる わた われ  
主宰よ、日を送りて爾を讚榮す、救世主よ、求む、我に誘なく暮と夜とを度らしめて、我を  
すく たま  
救ひ給へ。

いま いつ よよ  
今も何時も世に、「アミン」。

せい もの ひ おく なんじ さんしょう きゅうせいしゅ もと われ ぶなん くれ よる わた  
聖なる者よ、日を送りて爾を讚頌す、救世主よ、求む、我に無難に暮と夜とを度らしめて、  
われ すく たま  
我を救ひ給へ。

むけい せい や うた なんじ ほ あ りくよく ぞうぶつ た えざる こえ  
無形の性のヘルウィムは息めざる歌にて爾を讃め揚げ、六翼の造物セラフィムは絶えざる聲に  
なんじ どうと うた てんし ばんぐん せいさん うた なんじ あが ほ けだしなんじ ばんゆう さき みずか せん  
て爾を尊み歌ひ、天使の萬軍は聖三の歌にて爾を崇め讃む、蓋爾は萬有の先より自ら存す  
ちち どう むげん なんじ こ たも どうせん いのち しん いた さんい わか あらわ たま  
る父にして、同無原なる爾の子を有ち、同尊なる生命の神を出し、三位の分れざるを顯し給ふ。

しせい どうていじょ かみ はは した せいげん み これ つと もの よげんしゃ およ ちめいしゃ われ し  
至聖なる童貞女・神の母と、親しく聖言を見て之に役めし者と預言者及び致命者の群よ、死せ  
ざる生命を有つに因りて、我等の爲に切に祈り給へ、我等皆苦難の中に在ればなり。願はくは  
いのち たも よ われら ため せつ いの たま われら みなくなん うち あ ねが  
我等凶悪の誘を遁れて、天使の歌を歌はん、聖、聖、聖なる三聖の主よ、我等を憐みて救ひ  
たま  
給へ、「アミン」。

【信経】

われしん ひとつ かみ ちち ぜんのおしや てん ち み み ばんぶつ つく しゅ またしん ひとつ しゅ  
我信ず一の神、父、全能者、天と地、見ゆると見えざる萬物を造りし主を。又信ず一の主イ  
かみ とうせい こ よるずよ さき ちち うま ひかり ひかり まこと かみ まこと  
イススハリストス、神の獨生の子、萬世の前に父より生れ、光よりの光、眞の神よりの眞の  
かみ うま もの つく あら ちち いったい ばんぶつかれ つく われら ひとびと ため また われら  
神、生れし者にて、造られしに非ず、父と一體にして、萬物彼に造られ、我等人人の爲、又我等  
すくい ため てん くだ せいしんおよ どうていじょ み と ひと な われら ため  
の救の爲に天より降り、聖神及び童貞女マリヤより身を取り、人と爲り、我等の爲にポンティ  
とき じゅうじか くぎ くるしみ う ほうむ だいさんじつ せいしょ かな ふっかつ てん のぼ  
イピラトの時十字架に釘うたれ、苦を受け、葬られ、第三日に聖書に應ひて復活し、天に升  
ちち みぎ ざ こうえい あらわ い もの し もの しんぼん ため またきた そのくにおわり  
り、父の右に坐し、光榮を顯して生ける者と死せし者とを審判する爲に還來り、其國終な  
またしん せいしん しゅ いのち ほどこ もの ちち い ちちおよ こ とも おが ほ よげんしゃ  
らんを。又信ず聖神、主、生を施す者、父より出で、父及び子と共に拜まれ、讃められ、預言者  
もつ かつ い またしん ひとつ せい おおやけ しと きょうかい われみと ひとつ せんれい もつ つみ  
を以て嘗て言ひしを。又信ず一の聖なる公なる使徒の教會を。我認む一の洗禮を以て罪の  
ゆるし う われのぞ ししや ふっかつ ならび らいせい いのち  
赦を得るを。我望む死者の復活、並に來世の生命を、「アミン」。







いま いつ よよ  
今も何時も世に、「アミン」。

しょうしんじょ われなんじ はじ え たのみ すくい え しじょう もの なんじ てんたつ え おそ  
生神女よ、我爾を辱を得ざる憑恃として救を得ん、至浄の者よ、爾の轉達を得て恐れざら  
ん、爾のお覆を鎧の如く衣、爾が有能の佑助を受けて、我が敵を驅り、之に勝たん、故に祈り  
て爾に呼ぶ、女幸よ、爾の祈禱を以て我を救ひ給へ、爾より身を取りし神の子の力を以て我  
を暗き眠より起して爾を讚榮せしめ給へ。

しゅあわれ  
主 憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ しょうしんじょ  
ヘルウィムより尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の生神女  
たる爾を崇め讃む。

しんが しゅ な もつ ふく くだ  
神父よ、主の名を以て福を降せ。

しゅ われら かみ わ しよせい しんが きとう よ われら あわれ たま  
司祭 主イイススハリストス我等の神よ、吾が諸聖神父の祈禱に依りて我等を憐み給へ。

誦経 「アミン」。

【聖大ワシリイの祝文】

しゅ しゅ われら ひる もろもろ ながれや のが もの われら くらやみ ゆ もろもろ がい のが  
主よ、主よ、我等を晝の諸の流矢より脱れしめし者よ、我等を闇冥に行く諸の害より脱れし  
め給へ。我が手を擧ぐるを晩の祭として受け給へ。我等に過なく、悪に誘はれずして、夜の  
みち とお たま われら あくま きた もろもろ みだれ おそれ のが たま われら たましい かんどう  
路を過らしめ給へ。我等を悪魔より来る諸の紛擾と畏懼より脱れしめ給へ。我等の靈に感動  
を與へ、我等の心に畏るべき義なる爾の審判に對ふべきことを慮らしめ給へ。我等の體を  
なんじ おそ おそれ くぎ たま われら ち あ にくよく ころ たま われら ねわり しずか とき なんじ  
爾を畏るる畏に釘うち給へ、我等が地に在る肉慾を殺し給へ。我等が眠の静なる時にも爾  
の誠を見るに因りて照さるるを得しめ給へ。我等より諸の妄想と害ある慾とを除き給へ。  
われら きとう とき おこ わ しん かた なんじ いましめ おこな すす たま なんじ どくせいし じれん  
我等を祈禱の時に興して、我が信を固め、爾の誠を行ふに進ましめ給へ、爾が獨生子の慈憐  
と仁慈に因りてなり。爾は彼と至聖至仁生命を施す爾の神と偕に崇め讃めらる、今も何時も  
よよ  
世に、「アミン」。

きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん。叩拜一次

きた われら おう かみ こうはい ふふく  
來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。叩拜一次

きた われら おう かみ まえ こうはい ふふく  
 来れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。叩拜一次

第 50 聖詠

かみ なんじ おおい あわれみ よ われ あわれ なんじ めぐみ おお よ われ ふほう け たま しぼしぼ  
 神よ、爾の大なる隣に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹し給へ。屢  
 われ わ ふほう あら われ わ つみ きよ たま けだしわれ わ ふほう し われ つみ つね わ  
 我を我が不法より洗ひ、我を我が罪より清め給へ、蓋我は我が不法を知る、私の罪は常に我が  
 まえ あ われ なんじひとりなんじ つみ おか あく なんじ め まえ おこな なんじ なんじ しんだん ぎ  
 前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審断に義にして、  
 なんじ さいばん おおやけ み われ ふほう おい ほら わ はは つみ おい われ う み なんじ  
 爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾  
 ころ しんじつ あい わ うち おい ちえ われ あらわ もつ われ そそ しか  
 は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。「イソップ」を以て我に沃げ、然  
 われいさぎよ われ あら しか われゆき しろ われ よろこび たのしみ き たま  
 せば我潔くならん、我を滌へ、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給へ、  
 しか なんじ お ほね よろこ なんじ かんばせ わ つみ さ わ ことごと ふほう け たま  
 然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給へ。  
 かみ いさぎよ ころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま われ なんじ かんばせ お なか  
 神よ、潔き心を我に造れ、正しき靈を私の衷に改め給へ。我を爾の顔より逐ふこと母  
 なんじ せいしん われ と あ なか なんじ すくい よろこび われ かせ しゅさい しん もつ われ  
 れ、爾の聖神を我より取り上ぐる事母れ。爾が救の喜を我に還せ、主宰たる神を以て我  
 かた たま われ ふほう もの なんじ みち おし ふけん もの なんじ かせ かみ わ すくい かみ  
 を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、不虔の者は爾に歸らんとす。神よ、我が救の神  
 われ ち すく たま しか わ した なんじ ぎ ほ あ しゅ わ くちびる ひら しか  
 よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然  
 わ くち なんじ さんび あ けだしなんじ まつり ほつ ほつ われこれ たてまつ なんじ やきまつり  
 ば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲すれば我之を獻らん、爾は燔祭を  
 よろこ かみ よろこ まつり つうかい たましい つうかい けんそん ころ かみ なんじかる たま  
 喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給は  
 しゅ なんじ めぐみ よ おん た じょうえん た たま そのとき なんじ ぎ  
 ず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給へ。其時に爾義  
 まつり ささげもの やきまつり よろこ う そのとき ひとびとなんじ さいだん こうし そな  
 の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に贖を奠へんとす。

第 101 聖詠 <大斎第 1 週奉事式略では以下略>

主よ、我が祈を聆き給へ。願くは我が呼ぶ声は爾に至らん。爾の顔を我に匿す母れ、我が  
 憂の日爾の耳を我に傾け給へ、我が爾に呼ばん日に速やかに我に聴き給へ、蓋我が日は煙  
 の如く消え、我が骨は燼の如く焚かれたり、我が心は撃たれて草の如くに枯れ、我は我が  
 餅を食ふを忘るるに至る、我が呻吟の声に依りて我が骨は我が肉に貼けり。我は野に在る  
 鶉の如く荒舎にあるみみづくの如くなれり、我が眠らずして坐するは屋蓋にある孤鳥の  
 如し。我が敵は日々に我を謗り、我を恨む者は我を指して誓ふ。我は灰を餅の如くに食ら  
 ひ、我が飲物に涙を和ふ。爾の怒と爾の憤に因てなり、蓋爾曾て我を挙げ、復我を墮せり。  
 我が日は傾けるひかげの如く、枯れしこと草の如し。唯主よ、爾は永く存す、爾を記憶す

るは世々に在り。爾起きて憐をシオンに垂れん、蓋之を憐む時至れり。蓋時来れり、爾の僕は其石をも愛し、其塵をも惜めばなり。諸民は主の名を畏れ、地上の諸王は爾の光栄を畏れん。蓋主はシオンを建てて、己が光栄の中に頭はれん、無憑者たよりなきものの禱を顧みて、其願を軽んぜざらん。是れ後の世の為に記され、未来の民は主を崇め讃めん。蓋彼は其聖なる高き所より俯し臨み、主は天より地を鑿かんがみたり、俘とりこの呻吟を聞きて死の子を解かん為、彼等が主の名をシオンに伝へ、其譽をイエルサリムに知らさんが為なり、是れ諸民諸国が均ひとしくく集りて主に事へん時に在り。彼途中に於て我が力を弱め、我が日を短くせり。我謂へり、我が神や我が日の半に於て我を取上ること母れ。爾の年は世々に在り。主よ、爾初に地を基けたり、天も爾が手の造つく工なり。此等は亡びん、然れども爾は永く存す、彼等は皆衣の如く古び、爾衣服の如く之を更へ、此等は易らん、然れども唯爾は易やすらず、爾の年は終らざらん。爾の僕の子は生き存へ、其裔は爾が顔かほの前に堅く立たん。

【イウデヤ王マナッシャの祝文】

主全能者、吾が先祖アウラアム、イサク、イアコフ、及び其義なる裔の神よ、爾は天地と其都ての飾とを作り、爾が誠の言にて海を縛り、淵を閉ち、畏るべくして榮えたる爾の名を以て之を封印せり、萬物は其名を恐れ、爾が力の前に戦く、蓋爾が光栄の莊嚴なる前には誰も立つ能はず、罪人に於ける爾の厳しき怒は堪へ難し、然れども爾が契約の憐は測り難く、窮め難し、蓋爾は仁慈にして寛忍、鴻恩にして人の罪惡を憂ふる至上の主なり。爾主よ、爾が仁慈の多きに依りて、爾の前に罪を犯しし者に痛悔と赦罪とを契約し、爾が慈憐の多きに依りて、罪人の爲に痛悔を定めて救を得しめ給へり。故に爾主、義人の神よ、義にして爾の前に罪を犯さざりしアウラアム、イサク、イアコフの爲には痛悔を立てず、乃我罪人の爲に之を立て給へり、蓋我罪を犯ししこと海の砂の数よりも多し。主よ、我が不法は數へ難し、我が不法は數へ難し、我は不義の多きに因りて、仰ぎて天の高きを見るに堪へず。我は多くの鐵の鎖にて屈められ、我が首を擧ぐる能はず、暫時も安んずる能はざるに至れり、蓋我は爾を怒らせ、惡を爾の前に犯し、爾の旨に循はず、爾の命を守らず、穢れし事を行ひ、誘惑を多く爲せり。今我が心の膝を屈めて、爾に仁慈を賜ふを祈る。主よ、我罪を犯せり、我罪を犯

せり、我は我が不法を知る、然れども爾に祈りて求む、主よ、我を赦し給へ、我を赦し給へ、  
 我を我が不法と共に亡す勿れ、永く我が悪を念ふ勿れ、我を地獄に定むる勿れ。蓋神よ、爾  
 は痛悔する者の神なり、爾の仁慈を傾けて我が上に顯し、爾の大なる隣に因りて我不當  
 の者を救ひ給へ、我生ける中爾を崇め讃めん、蓋天の衆軍は爾を讃め頌ふ、光榮は爾に世世  
 に歸す、「アミン」。 <大斎第1週奉事式略では以下略>

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、

聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に

行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債あ

る者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪

より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

誦經 「アミン」。

【トロパリ】 第六の調 歌う<楽譜は次ページ>

主よ、我等を憐めよ、我等を憐めよ、我等罪人何を言ふべきを知らず、唯此の祈祷を爾主宰に獻げて曰ふ、  
 我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

主よ、我等を憐めよ、我等爾を恃めばなり、我等を痛く怒る勿れ、我等の不法を憶ふ勿れ、今も仁慈なるに  
 因りて隣を垂れ、我等を諸の敵より救ひ給へ、爾は我等の神にて、我等は爾の民なり、皆爾の手の作れる  
 ものにて、爾の名を籲ぶに因る。

今も何時も世世に、「アミン」。

讃美たる生神女よ、我等の爲に隣の門を開け、爾を恃む者に亡ぶることなく、爾に依りて禍を遠るを得  
 しめ給へ、爾ハリストスの民の救なればなり。

トロバリ 6調

主よ、我等を憐れめよ、我等をあわれめよ、我等 罪人何を言うべきを  
 知らず ただ この祈禱を 爾主宰に 捧げて いーう  
 われらを あわれめよ、 光榮は父と子と聖神 に 歸す  
 主よ、我等を あわれめよ 我等 爾を<sup>たの</sup>めば なーり、  
 我等を いたく 怒るな かけれ 我等の不法を 思う な かけれ  
 今も仁慈なるに 因って 憐れみを 垂ーれ 我等を 諸の敵より 救いた まーえ、  
 爾は我等の神にて 我等は爾の民 なり 皆 爾の手の 造れるものにて  
 爾の名を 呼ぶに よーる 今も 何時も 世世に アミン、  
 讃美たる 生神女よ 我等の為に 憐れみの門を ひらーけ  
 爾を<sup>たの</sup>む者に 滅ぶること なーく 爾によつて<sup>わざわい</sup> 禍を 逃るるを得しめた まえ、  
 爾ハリストスのたみの すくい なれば なーり

誦經 <sup>しゅあわれ</sup>主 憐めよ。(三次 時課經では40次)

<sup>こうえい</sup>光榮は父と子と<sup>せいじん</sup>聖神に歸す、<sup>いま</sup>今も<sup>いつ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世世に、「アミン」。

ヘルウィムより<sup>とうと</sup>尊く、セラフィムに<sup>ならび</sup>並なく<sup>さか</sup>榮え、貞操を<sup>みさお</sup>壊らずして<sup>やぶ</sup>神言を<sup>かみことば</sup>生みし<sup>う</sup>實の<sup>じつ</sup>生神女<sup>しょうしんじょ</sup>  
たる<sup>なんじ</sup>爾<sup>あが</sup>を<sup>ほ</sup>崇め讚む。

神父<sup>しんが</sup>よ、主<sup>しゅ</sup>の名<sup>な</sup>を以て<sup>もつ</sup>福<sup>ふく</sup>を降<sup>くだ</sup>せ。

司祭<sup>しゅ</sup> 主<sup>われら</sup>イイスス<sup>かみ</sup>ハリストス<sup>わ</sup>我等<sup>しよせい</sup>の神<sup>しんが</sup>よ、吾<sup>きとう</sup>が諸<sup>よ</sup>聖<sup>われら</sup>神父<sup>あわれ</sup>の<sup>あわれ</sup>祈<sup>あわれ</sup>禱<sup>あわれ</sup>に依<sup>あわれ</sup>りて我等<sup>あわれ</sup>を憐<sup>あわれ</sup>めよ。

誦<sup>あわれ</sup>経<sup>あわれ</sup> 「アミン」。

主宰<sup>しゅさい</sup>神父<sup>かみちぜん</sup>全能<sup>のうしゃ</sup>者<sup>しゅどくせい</sup>、主<sup>こ</sup>獨<sup>およ</sup>生<sup>せいしん</sup>の子<sup>ゆいいち</sup>イイスス<sup>しんせい</sup>ハリストス<sup>ゆいいち</sup>、及<sup>のうりよく</sup>び<sup>われ</sup>聖<sup>われ</sup>神<sup>われ</sup>、惟<sup>われ</sup>一<sup>われ</sup>の<sup>われ</sup>神<sup>われ</sup>性<sup>われ</sup>、惟<sup>われ</sup>一<sup>われ</sup>の<sup>われ</sup>能<sup>われ</sup>力<sup>われ</sup>よ、我<sup>われ</sup>  
罪<sup>ざい</sup>人<sup>いん</sup>を<sup>あわれ</sup>憐<sup>あわれ</sup>み、爾<sup>なんじ</sup>が<sup>し</sup>知<sup>し</sup>る<sup>し</sup>所<sup>ところ</sup>の<sup>ほう</sup>法<sup>もつ</sup>を以<sup>われ</sup>て我<sup>ふとう</sup>不<sup>ぼく</sup>當<sup>すく</sup>の<sup>たま</sup>僕<sup>けだし</sup>を<sup>なんじ</sup>救<sup>よよ</sup>ひ給<sup>あが</sup>へ、蓋<sup>ほ</sup>爾<sup>ほ</sup>は世<sup>ほ</sup>世<sup>ほ</sup>に崇<sup>ほ</sup>め讚<sup>ほ</sup>めらる、  
「アミン」。

第 69 聖詠

神<sup>すみなが</sup>よ、速<sup>すみなが</sup>に我<sup>すみなが</sup>を救<sup>すみなが</sup>へ、主<sup>すみなが</sup>よ、速<sup>すみなが</sup>に我<sup>すみなが</sup>を助<sup>すみなが</sup>け給<sup>すみなが</sup>へ。我<sup>すみなが</sup>が靈<sup>すみなが</sup>を求<sup>すみなが</sup>むる者<sup>すみなが</sup>は、願<sup>すみなが</sup>はくは恥<sup>すみなが</sup>を得<sup>すみなが</sup>  
て<sup>すみなが</sup>辱<sup>すみなが</sup>を受けん、禍<sup>すみなが</sup>を我<sup>すみなが</sup>に望<sup>すみなが</sup>む者<sup>すみなが</sup>は、願<sup>すみなが</sup>はくは退<sup>すみなが</sup>けられて<sup>すみなが</sup>嘲<sup>すみなが</sup>けられん。我<sup>すみなが</sup>に向<sup>すみなが</sup>ひて<sup>すみなが</sup>嘻<sup>すみなが</sup>嘻<sup>すみなが</sup>と云<sup>すみなが</sup>  
ふ者<sup>すみなが</sup>は、其<sup>すみなが</sup>我<sup>すみなが</sup>を辱<sup>すみなが</sup>しむるに<sup>すみなが</sup>因<sup>すみなが</sup>りて、願<sup>すみなが</sup>はくは退<sup>すみなが</sup>けられん。凡<sup>すみなが</sup>そ爾<sup>すみなが</sup>を求<sup>すみなが</sup>むる者<sup>すみなが</sup>は、願<sup>すみなが</sup>はくは  
爾<sup>すみなが</sup>の為<sup>すみなが</sup>に喜<sup>すみなが</sup>び樂<sup>すみなが</sup>まん、爾<sup>すみなが</sup>の救<sup>すみなが</sup>を愛<sup>すみなが</sup>する者<sup>すみなが</sup>は、願<sup>すみなが</sup>はくは常<sup>すみなが</sup>に神<sup>すみなが</sup>は<sup>すみなが</sup>大<sup>すみなが</sup>なりと云<sup>すみなが</sup>はん。我<sup>すみなが</sup>は貧<sup>すみなが</sup>し  
くして<sup>すみなが</sup>乏<sup>すみなが</sup>し、神<sup>すみなが</sup>よ、速<sup>すみなが</sup>に我<sup>すみなが</sup>に格<sup>すみなが</sup>り給<sup>すみなが</sup>へ、爾<sup>すみなが</sup>は我<sup>すみなが</sup>の助<sup>すみなが</sup>なり、我<sup>すみなが</sup>を救<sup>すみなが</sup>ふ者<sup>すみなが</sup>なり、主<sup>すみなが</sup>よ、遅<sup>すみなが</sup>はる  
母<sup>すみなが</sup>れ。

第 142 聖詠

主<sup>すみなが</sup>よ我<sup>すみなが</sup>が<sup>すみなが</sup>禱<sup>すみなが</sup>を<sup>すみなが</sup>聆<sup>すみなが</sup>き、爾<sup>すみなが</sup>の真<sup>すみなが</sup>実<sup>すみなが</sup>に依<sup>すみなが</sup>て我<sup>すみなが</sup>が願<sup>すみなが</sup>ひに耳<sup>すみなが</sup>を傾<sup>すみなが</sup>けよ、爾<sup>すみなが</sup>の義<sup>すみなが</sup>に依<sup>すみなが</sup>りて我<sup>すみなが</sup>に聴<sup>すみなが</sup>き給<sup>すみなが</sup>へ。  
爾<sup>すみなが</sup>の僕<sup>すみなが</sup>と<sup>すみなが</sup>訟<sup>すみなが</sup>を<sup>すみなが</sup>為<sup>すみなが</sup>す母<sup>すみなが</sup>れ、蓋<sup>すみなが</sup>凡<sup>すみなが</sup>そ生<sup>すみなが</sup>命<sup>すみなが</sup>ある者<sup>すみなが</sup>は、一<sup>すみなが</sup>も爾<sup>すみなが</sup>の前<sup>すみなが</sup>に義<sup>すみなが</sup>とせられざらん。敵<sup>すみなが</sup>は我<sup>すみなが</sup>が  
靈<sup>すみなが</sup>を逐<sup>すみなが</sup>ひ、我<sup>すみなが</sup>が生<sup>すみなが</sup>命<sup>すみなが</sup>を地<sup>すみなが</sup>に蹂<sup>すみなが</sup>り、我<sup>すみなが</sup>を久<sup>すみなが</sup>く死<sup>すみなが</sup>せし者<sup>すみなが</sup>の如<sup>すみなが</sup>く暗<sup>すみなが</sup>きに居<sup>すみなが</sup>らしむ。我<sup>すみなが</sup>が靈<sup>すみなが</sup>は我<sup>すみなが</sup>の衷<sup>すみなが</sup>  
に悶<sup>すみなが</sup>え、我<sup>すみなが</sup>が心<sup>すみなが</sup>は我<sup>すみなが</sup>の衷<sup>すみなが</sup>に曠<sup>すみなが</sup>しきが如<sup>すみなが</sup>し。我<sup>すみなが</sup>古<sup>すみなが</sup>の<sup>すみなが</sup>日<sup>すみなが</sup>を想<sup>すみなが</sup>ひ、凡<sup>すみなが</sup>そ爾<sup>すみなが</sup>の行<sup>すみなが</sup>ひし<sup>すみなが</sup>こと<sup>すみなが</sup>を考<sup>すみなが</sup>へ、  
爾<sup>すみなが</sup>が手<sup>すみなが</sup>の工<sup>すみなが</sup>作<sup>すみなが</sup>を計<sup>すみなが</sup>る。我<sup>すみなが</sup>が手<sup>すみなが</sup>を伸<sup>すみなが</sup>べて爾<sup>すみなが</sup>に向<sup>すみなが</sup>ひ、我<sup>すみなが</sup>が靈<sup>すみなが</sup>は渴<sup>すみなが</sup>きし地<sup>すみなが</sup>の如<sup>すみなが</sup>く爾<sup>すみなが</sup>を慕<sup>すみなが</sup>ふ。主<sup>すみなが</sup>よ  
速<sup>すみなが</sup>に我<sup>すみなが</sup>に聴<sup>すみなが</sup>き給<sup>すみなが</sup>へ。我<sup>すみなが</sup>が靈<sup>すみなが</sup>は衰<sup>すみなが</sup>へたり。爾<sup>すみなが</sup>の顔<sup>すみなが</sup>を我<sup>すみなが</sup>に隠<sup>すみなが</sup>す勿<sup>すみなが</sup>れ、然<sup>すみなが</sup>からずば我<sup>すみなが</sup>は墓<sup>すみなが</sup>に入る  
者<sup>すみなが</sup>の如<sup>すみなが</sup>くならん。我<sup>すみなが</sup>は夙<sup>すみなが</sup>に爾<sup>すみなが</sup>の憐<sup>すみなが</sup>を聴<sup>すみなが</sup>かしめ給<sup>すみなが</sup>へ、我<sup>すみなが</sup>爾<sup>すみなが</sup>を頼<sup>すみなが</sup>めばなり。主<sup>すみなが</sup>よ、我<sup>すみなが</sup>に行<sup>すみなが</sup>くべ  
き途<sup>すみなが</sup>を示<sup>すみなが</sup>し給<sup>すみなが</sup>へ、我<sup>すみなが</sup>が靈<sup>すみなが</sup>を爾<sup>すみなが</sup>に挙<sup>すみなが</sup>ぐればなり。主<sup>すみなが</sup>よ、我<sup>すみなが</sup>を我<sup>すみなが</sup>が敵<sup>すみなが</sup>より救<sup>すみなが</sup>ひ給<sup>すみなが</sup>へ。我<sup>すみなが</sup>爾<sup>すみなが</sup>に趨<sup>すみなが</sup>り  
附<sup>すみなが</sup>く。我<sup>すみなが</sup>に爾<sup>すみなが</sup>の旨<sup>すみなが</sup>を行<sup>すみなが</sup>ふを教<sup>すみなが</sup>へ給<sup>すみなが</sup>へ、爾<sup>すみなが</sup>は我<sup>すみなが</sup>の神<sup>すみなが</sup>なればなり。願<sup>すみなが</sup>はくは爾<sup>すみなが</sup>の善<sup>すみなが</sup>なる<sup>すみなが</sup>神<sup>すみなが</sup>は我<sup>すみなが</sup>  
を義<sup>すみなが</sup>の地<sup>すみなが</sup>に導<sup>すみなが</sup>かん。主<sup>すみなが</sup>よ、爾<sup>すみなが</sup>の名<sup>すみなが</sup>に依<sup>すみなが</sup>て我<sup>すみなが</sup>を生<sup>すみなが</sup>し給<sup>すみなが</sup>へ。爾<sup>すみなが</sup>の義<sup>すみなが</sup>に依<sup>すみなが</sup>て我<sup>すみなが</sup>が靈<sup>すみなが</sup>を苦<sup>すみなが</sup>難<sup>すみなが</sup>より出<sup>すみなが</sup>  
し給<sup>すみなが</sup>へ、爾<sup>すみなが</sup>の憐<sup>すみなが</sup>を以<sup>すみなが</sup>て我<sup>すみなが</sup>が敵<sup>すみなが</sup>を滅<sup>すみなが</sup>し、凡<sup>すみなが</sup>そ我<sup>すみなが</sup>が靈<sup>すみなが</sup>を攻<sup>すみなが</sup>むる者<sup>すみなが</sup>を<sup>すみなが</sup>衰<sup>すみなが</sup>げ給<sup>すみなが</sup>へ、我<sup>すみなが</sup>は爾<sup>すみなが</sup>の僕<sup>すみなが</sup>なれ  
ばなり。

いとたか こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみのぞ しゅてん おう かみちぜんのおしや しゅどくせい  
至高には光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。主天の王、神父全能者よ、主獨生  
の子イイススハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光榮に因りて、我等爾を崇め、爾を讃め  
揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任  
ひし者よ、我等を憐み給へ、世の諸の罪を任ひし者よ、我等の禱を納れ給へ。父の右に坐す  
る者よ、我等を憐み給へ。爾は獨聖なり、爾は獨主イイススハリストス、神父の光榮を顯  
す者なればなり、「アミン」。

われ や や なんじ ほ あ なんじ な よよ あが うた  
我夜夜に爾を讃め揚げ、爾の名を世世に崇め歌はん。

しゅ なんじ よよ われら かくれが われかつ い しゅ われ あわれ わ たましい いや たま われ  
主よ、爾は世世に我等の避所たり。我曾て言へり、主よ、我を憐み、我が靈を醫し給へ、我  
罪を爾に得たればなり。主よ、爾に趨り附く、爾の旨を行ふを我に教へ給へ、爾は私の神、  
生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀ん。憐を爾を知る者に恒に垂れ  
給へ。

しゅ われら まも つみ こ よ わた たま しゅ わ せんぞ かみ なんじ あが ほ  
主よ、我等を守り、罪なくして此の夜を度らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、  
爾の名は世世に尊み歌はる、「アミン」。

しゅ なんじ たの よ なんじ あわれみ われら た たま しゅ なんじ あが ほ なんじ いましめ  
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠  
を我に訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ給へ。聖なる者よ、爾  
は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給へ。主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造り  
し物を棄つる勿れ。讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時  
も世世に、「アミン」。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる せい  
至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖  
なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

しゅあわれ  
主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

てん いま われら ちち ねが なんじ な せい なんじ くに きた なんじ わね てん おこな  
天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行は



るが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等  
ゆるすが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、  
誦經 「アミン」。

嗣ぎて朗聲を以て左の句を歌ふ、第六の調に依る。

ソロ 萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍の主よ、我等を憐み給へ。

(詠) 繰り返す

萬軍の主よ、我等とともにせよ、爾の他 我が憂いの時に  
助くるものなし、萬軍の主よ、我等をあわれみたまへ。

神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

(詠) 萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし…<以下同様>

其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。(詠) 萬軍の主よ

角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。(詠) 萬軍の主よ

鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。(詠) 萬軍の主よ

和聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚  
げよ。(詠) 萬軍の主よ

神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。(詠) 萬軍の主よ

(詠) 光榮は父と子と聖神に歸す。

主よ、若し我等の爲に祈る爾の聖者と、我等を憐む爾の慈憐あらずば、我等如何で爾諸天使より恒に讚榮せ  
らるる主を讃め歌ふを得ん、心を知る者よ、我等の靈を宥め給へ。

今も何時も世に、「アミン」。

生神女よ、我が罪は甚多し、浄き者よ、爾に趨り附きて救を求む、獨讚美せらるる者よ、我が病める靈を  
顧みて、爾の子吾が神に我が行ひし罪惡の赦を賜はんことを祈り給へ。

至聖なる生神女よ、我が生ける中我を棄つる勿れ、我を人の轉達に委ぬる勿れ、乃親ら我を護りて救ひ給へ。  
神の母よ、我が恃を以て盡く爾に負はしむ、願はくは我を爾の覆の下に守り給へ。

光栄は父と子と聖神に帰す 主よ、我等のために 祈る

爾の聖者と、 我等を憐れむ 爾の慈憐あらずば、

我等 如何で なんじ 諸天使 より 常に讃栄せらるる

主を 讃めうたうを得ん、 心を知るものよ

我等の霊を なため たまーえ 今も何時も世世にアミン、

生神女よ、我が罪は甚だおおし、 浄き者よ、爾にはしりつけて

救いをもとむ 独り 讃美せらるるものよ、

我が病める 霊をかえりみて、 爾の子 吾がかみに

我が行いし 諸悪の 赦しを賜わんとを いのり たまーえ。

至聖なる 生神女よ、 我が生けるうち 我を棄つるな かけ、

我を人の 転達<sup>てんたつ</sup>に 委<sup>ゆだ</sup>ぬるな かー れ、すなわち、みずから 我を<sup>まも</sup>りて  
 すくい たまー え、かみの はは よ、我が 侍<sup>たの</sup>みを  
 もーつて ことごとく 爾に 負わしーむ  
 願くは 我を <sup>おお</sup>い 爾の覆いのしたに まもり たまー え。

誦經 <sup>しゅあわれ</sup> 主 憐めよ。(12次時課經では40次)

いづれ ひいづれ とき てん ち こうはいさんえい かんにん こうじ しぜん ぎじん あい さいにん  
 何の日何の時に、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人  
<sup>あわれ らいせい ふく やく よろず もの すくい まね</sup>  
 を 憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時  
<sup>いのり う われら いのち なんじ いましめ むか たま われら たましい せい からだ いきぎよ</sup>  
 の 祈をも受け、我等の生命を爾の 誠に向はしめ給へ、我等の 靈を聖にし、體を 潔くし、  
<sup>おもんばかり なお おもい きよ われら ことごと うれい わざわい やまい すく なんじ せい てんし もつ</sup>  
 慮を直くし、思を浄くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救ひ、爾の聖なる天使を以  
<sup>われら めぐ われら そのかこみ まも みちび しん いつ なんじ ちか がた こうえい さと いた</sup>  
 て我等を環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至ら  
<sup>たま けだしなんじ よよ あが ほ</sup>  
 せ給へ、蓋 爾は世世に崇め讚めらる、「アミン」。

<sup>しゅあわれ</sup> 主 憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワィムより <sup>とうと</sup> 尊く、セラフィムに <sup>ならび</sup> 並なく榮え、貞操を壊らずして神言 <sup>さか みさお やぶ</sup> を生みし實の生神女  
<sup>なんじ あが ほ</sup>  
 たる 爾を崇め讚む。

<sup>しんが しゅ な もつ ふく くだ</sup>  
 神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 <sup>かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんじ かんげせ もつ われら たら ならび われら</sup>  
 神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾の 顔を以て我等を照し、並に我等を  
<sup>あわれ たま</sup>  
 憐み給へ。

誦經 「アミン」。

司祭【聖エフレムの祝文】

しゅわ いのち しゅさい おこたり もたえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか  
主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。叩拜一次

みさお へりくんだり こらえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま  
貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。叩拜一次

ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんじ よよ あが ほ  
嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世に崇め讃めらる、「ア  
ミン」。叩拜一次

かみ われざいにん きよ たま  
神よ、我罪人を浄め給へ。(躬拜12次)

しゅわ いのち しゅさい おこたり もたえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか みさお へりくんだり  
主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。貞潔と、謙遜

と、  
こらえ あい ころろ われなんじ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ  
忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せ

ざるを賜へ、蓋爾は世に崇め讃めらる、「アミン」。叩拜一次

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
誦経 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる せい  
至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる

もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんじ な よ  
者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

しゅあわれ  
主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

てん いま われら ちち ねが なんじ な せい なんじ くに きた なんじ むね てん おこな  
天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はる

るが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免す

ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なお われら きょうあく すく たま  
が如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 けだしくに けんのう こうえい なんじちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。

誦経 「アミン」。

しゅあわれ  
主憐めよ。三次

【祝文 エワエルゲティダ修道院の修士パワエルの作】

けがれ いざな く いた いさぎよ きよ どうていじよ かみ よめ じよさい いとさか  
穢なく、誘はるるなく、朽つるなくして、至りて潔く、清き童貞女・神の嫁・女宰よ、最榮え

さん かみことば ひと あわ てん はな わ せい またてん あわ もの のぞみ もの ひとり のぞみ  
たる産にて神言を人に合せ、天に離れたる我が性を復天に合せし者よ、望なき者の獨の望

たたか もの たすけ はし つ もの ため そな まもり しゅう かくれが もの  
と、戦ふ者の援よ、趨り附く者の爲に備へたる衛と、衆「ハリストティアニン」の避所なる者

よ、我不潔なる罪人、汚れたる思と言と行にて己を全く不當の者と爲し、憎れる心に  
 て世の樂の奴隷と爲りし者を厭ふ勿れ、乃仁慈なる神の母たるに因りて、人を愛する心を  
 以て、我罪人不潔なる者を憐み、我が汚れたる口より爾に捧ぐる祈禱を納れ、母たる勇を以  
 て、爾の子、吾が主宰及び神に禱り給へ、彼が我が爲に其仁慈の懷を開き、我が數へ難き罪過  
 を思はずして、我を痛悔に向はしめ、其誠を行ふに鍊達なる者と爲さん爲なり。憐深く、  
 慈廣く、善を愛するに因りて、此の生に於ける熱心の轉達者及び扶助者よ、爾恒に我が前  
 に立ちて、我を攻むる諸敵を退け、我を救に導き、我が堪えざる靈を臨終の時に守り、  
 凶悪なる魔鬼の醜き像を遠く我より逐ひ、畏るべき審判の日に我を永遠の苦より脱れし  
 め、我を爾の子吾が神の言ひ難き光榮を嗣ぐ者と爲し給へ、吾が女宰、至聖なる生神女よ、願  
 はくは我之を得ん、爾の轉達と守護と、爾の子吾が主神救世主イイススハリトストの恩寵と  
 仁慈に因りてなり。悉くの光榮、尊貴、伏拜は彼と、彼の無原の父と、至聖至仁生命を施す  
 彼の神とに歸す、今も何時も世に、「アミン」。

【祝文 修士アンティオフパンデクトの作】

主宰よ、我等眠らんとする者に體と靈との休息を與へ給へ。我等を罪の闇き眠と、諸の  
 夜中の昧き安逸より守り、諸慾の動くを抑へ、悪敵が我等を欺きて射る所の火箭を滅し、我が  
 肉體の闘を鎮め、諸の地上物體の慮を斷たしめ給へ。神よ、我等に倣醒の智慧、貞潔の  
 思、醒めたる心、安き眠、「サタナ」より來る邪なる夢なきを賜ひ、我等を祈禱の時に興  
 して、爾の誠を行ふに固め、爾の律を恒に我が中心に思はしめ、徹夜の讚美を我等に賜  
 ひて、爾父と子と聖神の最尊くして嚴なる名を尊み歌ひ、崇め讚めさせ給へ、今も何時も  
 世に、「アミン」。

至榮なる永貞童女ハリストス神の母よ、我等の祈禱を爾の子吾が神に攜へ、爾に藉りて我等  
 の靈を救はしめ給へ。

【聖イオアンニキイの祝文】

我が憑持は父、我が避所は子、我が幟は聖神なり、聖三者よ、光榮は爾に歸す。

司祭 ハリストス神、我等の憑持よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

詠隊 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

主 憐め、主 憐め、主 憐めよ。 福を降せ。

是の時衆人地に俯伏し、司祭之に向ひて左の祝文を高誦す。

主宰大仁慈なる主 イススハリストス我等の神よ、至浄なる我等の女宰・生神女・永貞童女マ  
リヤの 祈りと、生命を施す 尊き十字架の力と、無形なる 尊き天軍、光榮なる 尊き預言者・  
前駆・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、光榮なる凱旋の聖致命者、克肖 捧神なる吾  
が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び爾が 悉くの聖人の轉達に  
因りて、我等の祈りを聴き納れ、我等に罪過の赦を賜ひ、我等を爾が翼の蔭に覆ひ、諸の  
仇敵を我等より遠ざけ、我等の生命を平安ならしめ給へ、主よ、我等と爾の世界とを憐み、  
并に我等の 靈を救ひ給へ、爾は善にして人を愛する主なればなり。

### 【連禱】

我が国の天皇及び国を 司 どの者の爲に主に 禱らん (詠) 主 憐めよ (まっすぐ、以下同様)

教會を 司 る 尊貴なる我等の 東京の 大主教及び全日本の 府主教ダニイル、尊貴なる我等の

仙台の 主教セラフィム、ハリストスに於ける我等の 悉くの兄弟の爲、

我等を恨み、及び我等を愛する者の爲、

我等を 憐み、及び我等に務むる者の爲、

我等不當の者に 己に代りて 祈るを頼みし 人人の爲、

擄となりし者の救はれん爲、

詠隊 主 憐めよ。

他出せる我等の諸父兄弟の爲、

海を航る者の爲、

病に臥す者の爲に 禱らん。

又地の果の 豊ならん爲、

及び 悉くの正教の「ハリストティアニン」の 靈の爲に 禱らん。

敬虔の諸王、正教の諸 主教、及び此の聖堂の 建立者、我等の父母、己に過ぎ去りし我等の 悉

くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者を記憶して、彼等の爲にも曰はん、  
(詠) 主憐め、主憐め、主憐めよ。

司祭 主イイススハリストス我等の神よ、吾が諸聖神父の祈祷に依りて我等を憐み給へ。  
(詠) 「アミン」。